

「自分」束縛に関わる述部と先行詞の語彙的性質

岸田真樹 (神戸松蔭女子学院大学大学院)
maki-k@sils.shoin.ac.jp

1 Introduction

- 「自分」は照応形と代名詞の性質をもつためにどちらの категорияに属するかが議論されてきた。
 - 照応形として分析 : Katada (1991), Aikawa (1993)...
 - 代名詞として分析 : Fukui (1984), Ueda (1986)...
- その多くは枠組みとして束縛原理 (Chomsky 1981) (A: 照応形はその統率範疇の中で束縛されていなければならない。B: 代名詞はその統率範疇の中で束縛されてはならない。)を用いる。
- しかし、束縛原理では(1)の「自分」のふるまいを規定できない。

(1) 太郎_iが [花子_jが 自分_{ij}を批判した] と思った。
→ 「自分=太郎」「自分=花子」 どちらの読みも可能。
- 本研究では Reinhart and Reuland (1993) での「述部の語彙的性質」「再帰要素の機能」に着目した再帰分析、Reuland (2006)に基づき「自分」を照応形とみなす。

2 Reinhart and Reuland (1993)

- Condition A: A reflexive-marked *syntactic* predicate is reflexive.
 - Condition B: A reflexive *semantic* predicate is reflexive-marked.
 - 定義 (a): A predicate is *reflexive-marked* iff either it is lexically reflexive or one of its arguments is a SELF-anaphor.
 - 定義 (b): A predicate is *reflexive* iff two of its arguments are coindexed.
- (Reinhart & Reuland 1993: 678)
- 語彙的性質による述部の3分類: inherently reflexive / non-reflexive / either value
 - 機能による再帰形の2分類: SELF-anaphors (reflexivizerとして機能) / SE-anaphors

(2) Max_i gedraagt_(reflexive) {zich_i / *zichzelf_i} (Dutch)
behaves himself

(3) Max_i haat_(non-reflexive) {zichzelf_i / *zich_i}
hates himself

3 Application of Reinhart and Reuland (1993) to Japanese

- Kishida (2005) で Reinhart and Reuland (1993) の分析を日本語に適用:

– 性質による述部の3分類 $\left\{ \begin{array}{l} \text{reflexive:} \quad \text{謙遜する, 恥じる...} \\ \text{non-reflexive:} \quad \text{誘拐する, 脅す...} \\ \text{either value:} \quad \text{批判する, 責める...} \end{array} \right\}$

– 機能による再帰形の2分類 $\left\{ \begin{array}{l} \text{reflexivizer:} \quad \text{自分自身} \\ \text{non-reflexivizer:} \quad \text{自分} \end{array} \right\}$

- Condition A の適用:

(4) 太郎 i -が [花子 j -が 自分 $*i/j$ -を謙遜した (reflexive)] と思った。

→ 述部「謙遜する」が語彙的に reflexive の性質をもつので reflexive-mark されており、それがとる2項(「花子」と「自分」)が同一指標をもち reflexive であるため「自分=花子」の読みが導かれる。

- Condition B の適用:

(5) 太郎 i -が [花子 j -が 自分 $i/*j$ -を誘拐した (non-reflexive)] と思った。

→ 述部「誘拐する」のとる2項が同一指標をもち reflexive であるが、述部が reflexive-mark されないために Condition B を満たさない。従って「自分=花子」の読みが排除される。

⇒ ではなぜ (5) で「自分=花子」の読みが排除されると「自分=太郎」となるのか。

4 Local and ‘Long-distance’ binding

- Reinhart and Reuland (1993) で「述部の語彙的性質」としたものを本研究では語彙素性 [Ref] として扱う。

– 述部が素性 [+Ref] をもつならば「自分」は局所に先行詞をとる。

(6) [DP₁-が [DP_{2*i*}-が 自分 i -を 述部 [+Ref]] と 主文述部] (…いわゆる局所束縛)

– 述部が素性 [-Ref] をもつならば「自分」は局所に先行詞をとることができない。

(7) [DP_{1*i*}-が [DP₂-が 自分 i -を 述部 [-Ref]] と 主文述部] (…いわゆる長距離束縛)

cf. (8) のように素性 [-Ref] をもつ述部が「自分」を項として単文で現れる場合、局所の要素は先行詞とならない。

(8) (状況：太郎 j は事件のあと警察で言った。)
「花子 i が 自分 $*i/j$ を誘拐した [-Ref] んです。」

- 一見「長距離」と捉えられる束縛は、局所束縛とコントロールによって生じると分析する。
 - 明示的・非明示的に関わらず日本語にはモダリティ句があり「自分」は常にその中で局所束縛をうけるとする Nishigauchi (2005) に従い、モダリティを反映するモダリティ句 (ModP) を仮定し、日本語では ModP までを局所とみなすとする。

(9) *Zibun* is locally bound by DP in SpecVP (and/or SpecvP), SpecSubjP, or SpecModP.
(Nishigauchi 2005: (33))

- モダリティが明示的な場合: (10)
モダリティを示す要素「花子」が指定部に入り、「自分」を局所束縛する。「花子」はこの文の中の視点 (Point-of-View) をもつ要素でありこのような視点をもつ要素は素性 [POV] をもつと仮定する。本研究での「視点」とは Sells (1987) で挙げられた 3 つの役割 (SOURCE, SELF, PIVOT) のいずれかのカテゴリーに属するものとする。

(10) 花子_i は [恋人_j が 自分_{i*} を誘拐して] しまった。

(11) [ModP 花子_i [POV]-は [恋人-が 自分_i-を誘拐して [-Ref]] しまった。]

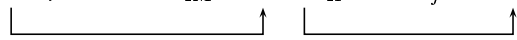


局所束縛

- モダリティが非明示的な場合: (12) (=5)

ModP 指定部には PRO が入り、「自分」を局所束縛する。その PRO は [POV] をもつ要素によってコントロールされ、結果として「自分」は非局所に先行詞をとる。

(12) [太郎_i [POV]-が [ModP PRO [IP 花子_j が 自分_{i*} を誘拐した [-Ref]]] と思った。]



コントロール

局所束縛

⇒ Reinhart and Reuland (1993) を適用するだけでは説明できなかった (5) に対し、「太郎」は視点をもつため ModP 指定部の PRO コントローラーとして機能し、その結果「自分」の非局所先行詞となる、と説明が与えられる。

5 ‘Backward’ binding

- 本研究では (13) のような一見「逆行」と捉えられる束縛も規定可能。

(13) 花子が自分_i をほめたこと-が 太郎_i-を喜ばせた。

- (13) の述部「喜ばせる」は心理動詞であり、この文の視点をもつ要素は「太郎」である。(13) は (14) のような構造をもつと仮定し、[POV] をもつ「太郎」は ModP 指定部の PRO コントローラーとして機能し、その結果「自分」の先行詞となると分析する。

(14) [太郎_i [POV] [ModP PRO [花子が自分_i をほめたこと-が 太郎_i-を喜ばせた。]]]



コントロール

局所束縛

⇒ 本研究では [POV] をもつ要素による PRO へのコントロールとその PRO による「自分」の局所束縛を仮定することにより、一見「逆行」と思われる「自分」の束縛にも説明が与えられる。

6 Conclusion

- 本研究では
 - 「自分」を項としてとる述部の語彙的性質 ([Ref]) に着目する
 - 視点 ([POV]) をもつ要素にに着目する
 - 「自分」は常に局所束縛をうけるとする

という分析を提案する。

- 視点やモダリティ (ModP) などの語用論的側面を統語に組み込むことによって、従来の統語だけで説明できない現象を含め、「局所」「長距離」「逆行」とされるすべての「自分」束縛に統一的な説明を与える。

Reference

- Aikawa, T. (1993). *Reflexivity in Japanese and LF-analysis of Zibun-Binding*. Ph.D. dissertation, Ohio State University, Columbus OH.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht.
- Fukui, N. (1984). Studies on Japanese Anaphora I: the adjunct subject hypothesis and zibun. ms, MIT.
- Katada, F. (1991). The LF Representation of Anaphors. *Linguistic Inquiry*, 22, 287–314.
- Kishida, M. (2005). *Binding and Reflexives in English and Japanese*. M.A. thesis, Kobe Shoin Graduate School, Kobe, Japan.
- Nishigauchi, T. (2005). ‘Point of View’ and the Logophoric Anchor. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin*, 8, 107–132.
- Reinhart, T., & Reuland, E. (1993). Reflexivity. *Linguistic Inquiry*, 24, 657–720.
- Reuland, E. (2006). Binding Theory: Terms and Concepts. In *The Blackwell Companion to Syntax vol.1*, pp. 250–283. Blackwell.
- Sells, P. (1987). Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry*, 18, 445–479.
- Ueda, M. (1986). Notes on a Japanese (reflexive) pronoun zibun. ms, University of Massachusetts, Amherst.